2025－ 2－ 1

21【街の散策からの気づき発見】
「銚子口の獅子舞」

会員 K.T.

1月12日（日）、銚子口香取神社へ「銚子口の獅子舞」を見に行った。この獅子舞は元禄10年(1697)に、現在の越ケ谷市市下間久里から伝えられたという。正式名称は「日本無双角兵衛獅子」といい、家内安全・護国豊穣・災難除去・天下泰平を祈願し、香取神社へ奉納される神事である。昭和61年(1986)に春日部市の無形民俗文化財に指定されている。

東京文化財研究所無形文化財部の調査では、日本には少なくとも数千の獅子舞が伝えられているらしい。獅子舞の歴史はは古い、奈良の正倉院には奈良時代の獅子頭が保存されている。天平勝宝4年(752)の墨銘があり、東大寺の大仏開眼供養の伎楽（ぎがく）に用いられたとの記録がある。獅子舞は、2人、あるいはそれ以上の人が入って演じるもので、伝承では仏教の伝来とともに伝わったという。その後、仏教の拡がりとともに全国に広まった。江戸時代になると、伊勢神宮の神職たちが、獅子舞を持って全国を回るようになった。こうした獅子舞を「大神楽」と呼び、江戸に伝わり、全国各地で演じられるようになった。ときには、曲芸も演じ、この太神楽がお正月に登場する獅子舞のスタンダードになった、といわれている。

江戸時代に頭に獅子頭を取り付けて、お腹につけた太鼓を打ち流しながら踊るタイプの獅子舞が登場した。これは、一人で一頭を演じるもので、これを「風流系」の獅子舞と呼んだ。関東から東北にかけては獅子3頭で演じる「三匹獅子舞」が広がっており、宮城から岩手にかけては獅子ではなく、鹿の頭をつけた「鹿踊り」が見られる。

「銚子口の獅子舞」は一人で一頭を演じるので、「風流系」の獅子舞になる。説明看板によると、「銚子口の獅子舞」の奉納日は一月十五日、七月十五日、十月二十三日（近い日曜日）とある。正月の締めの小正月、夏の豊作祈願、秋の収穫祈願のお祭り行事の伝統芸能として、現在は銚子口獅子舞保存会の皆さんにより、伝承されている。近い日曜日とは、演じる人達の仕事の都合などで、日程調整が行われたもののようだ。太夫獅子・中獅子・小獅子（女獅子）の三頭で舞う。最後の「幣掛り」の舞は、太夫獅子が神にささげた幣束（紙を細長い木に挟んだもので、神事の払いに使われる）を悪魔や悪霊退散等の祓いのため、舞台の四方を切る仕草と参列者の厄を祓いが行われる。私も見学者の中に混じり、お祓いを受けた。いいお正月の締めになった。民俗芸能とはなにか、『民俗芸能鑑賞の基礎知識』から咀嚼して引用すると、

「（前略）“神楽”・“盆踊り”など、これらは地縁的、信仰的な関係で、村落共同体で行われた“まつり”と呼べるものだ。（中略）大昔、人間生活は神々の支配するところと考えていた。神の言葉を聞いて、それに従っていく、（中略）、地域的に存在し、精神的に存在していた。こうした常のあり方が民俗と呼ばれている。（中略）われわれの生活を桶にたとえるならば、ときにゆるむ桶のたがを締めなければならない。そのたがを締めなおすことが、つまり祭りという行為である。人間の生活は一年という輪廻に左右され規定されている。締めるべき日を定期的に定め、年中行事を持ち、あるいはその形態としていろいろな芸能を演じることを繰り返し行ってきた。（後略）」、とある。日本の民俗芸能は獅子・鹿・猪あるいは龍などの動物に仮託したものが多い。獅子舞はつくりものの獅子頭をかぶって舞い、踊る芸能で、日本中に多く分布している。獅子舞はその構成が多様であるため、“獅子舞”として独立した民芸芸能として分類をされることもある。「銚子口の獅子舞」は私たちの生活様式が激変している中で328年の歴史を持ち、伝統芸能を持続している。伝統芸能は郷土を愛する人の心が引き継いでいかなければ続かない。その“源”は、郷土の誇りなのだろう、と思う。